The Japan Society for Culture in English

カズオ・イシグロのゴシック・モードとハイアート

川口 淑子

序

カズオ・イシグロの最初の長編小説『遠い山なみの光』(*A Pale View of Hills*) では、戦後の長崎を遠い風景のように思い出す女性が描かれる。ただし作品がクローズアップしているのは、個人の体験や特殊な時代ではなく、曖昧な記憶の中でしか生きていけない人物の生活であるだろう。実際に起こった出来事は主人公エツコの語りの陰に隠れるように進行して行くが、直接語られないところで動く物語は無意識を思わせる。この作品には、直接描くことのできない無意識、あるいは人間の理解や分析の下にあるものの表現が含まれていると考えることができる。

ロバート・ハンフリーは、特にモダニズムの小説を読む際には注目された「意識の流れ」を、理解力 (intelligence) や記憶 (memory) とは別のものであり、「意識の流れ」には無意識も含まれると定義している (Humphry 4) 。この分類から考えるなら、従来この要素と関わるとされるヴァージニア・ウルフやヘンリー・ジェイムズが除外される反面、自然と偽りの語りをしてしまう登場人物を抱えるカズオ・イシグロの作品はここに入ってくると言えるだろう。

イシグロの作品は多くの場合、語り手本人も完全には理解していない心の領域と実際の出来事の間で進行するように見える。本論では、『遠い山なみの光』を中心に取り上げながら、この中間領域に描かれるものを追う。

1．基調となる違和感

イシグロ本人は『遠い山なみの光』を特別ゴシック小説として書いたつもりはないとセバスチャン・グロースが行ったインタビューではコメントし、この作品のゴシック的雰囲気を「静かな表面下にある感情」だと説明している[1]。しかし、グロースがこのインタビューでも話題にしているように、読者の側の印象としては、この作品にはゴシック的薄暗さが感じられる。ただし、ゴシックという言葉で漠然と要約されてきたこの作品のどこか不気味な雰囲気は、恐ろしい事件が描かれていることからではなく、語りの不確かさ

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

から来るのが特徴である。作品では日本についての回想が始まって間もなく、語り手とその友人の幼い娘マリコとの対面が描かれるが、二人の関係は物語の不確かで薄暗い基調を示すかのように、不自然な描き方をさせる。友達と喧嘩した直後のマリコの様子を説明する際には、語り手はさっそく自分の思い違いを次のように認める。

> The little girl continued to stare up at me, saying nothing. What I had thought earlier to be a wound on her cheek, I now saw to be a smudge of mud. (16)

この場面での訂正は後に書かれる作品『日の名残り』(*The Remains of the Day*) のスティーヴンズの欺瞞の語りを予見しているようでもあるが、書かれている以上のことを想像させる不気味なイメージは直後にも続いている。語り手に対するマリコの警戒感は、以下の場面ではイマジズムの作品が取り上げそうな泥のついた足によって補強されているように見える。このイメージは、直接書かれていない語り手とマリコの不仲までも想像させる。

> She continued to stare up at me from the bottom of the slope. I could see her small shoes lying in the mud beside her. Her bare feet, like her shoes, were covered in mud. (17)

この作品の恐ろしさは、読者が情報を統合することにより生まれる。例えば以下の場面では、語り手のものとは異なるマリコの判断が混入されることで、いかにも親切そうなエツコのイメージが揺らいでくる。

> The little girl was watching me closely. "Why are you holding that?" She asked.
> "This? It just caught around my sandal, that's all."
> "Why are you holding it?"
> "I told you. It caught around my foot. What's wrong with you?" I gave a short laugh. "Why are you looking at me like that? I'm not going to hurt you."
> Without taking her eyes from me, she rose slowly to her feet. (173)

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

この場面でエツコが縄を手にしているのは、歩いている間にたまたま足に絡みついたためだと説明される。しかし、他の場面でもマリコを迎えに出たエツコの足に同じように縄が絡み、それを手にしているだけとエツコは説明しており、この繰り返しは非常に不自然である。なぜだか手に縄を持っている不可解さには、当時子供の殺害事件が近所で起こっていたことや、首をつるイメージが作品中で繰り返し描かれることを考え併せると、ある女性の戦後の体験談には不要な不気味さが見え隠れする。エツコは最後まで良識的な語り手という体裁を保つが、善良そうな彼女が日本でしたことが、はっきり語られない代わりに遠回りに暗示されることで、かえって読者は不信感を抱くことになる。このように事実と思われることと語りの間には溝があり、腑に落ちない語りを繰り返すことで、エツコ本人が罪をほのめかしているようにも見える。

2．曖昧な読者と偽名の語り

エツコは直接語りたくない、あるいはうまく語れない自分の思い出を語るが、その際に助けとなるのは語りかける相手の設定である。リディア・クーパーは、『日の名残り』のスティーヴンズや『わたしを離さないで』(*Never Let Me Go*) のキャシーが語りかける相手は架空の存在であり、常識から考えれば受け手としては不適切であると指摘している (Cooper 111)。これは、不確かな相手に語るエツコの場合にも当てはまるが、語りを十分に理解できないこの聞き手のお陰で語り手はある種の匿名性を手に入れ、嘘もつけるし、事実も語ることができるという自由を手に入れる。

架空の相手に話しかける際に生じる強みは、オスカー・ワイルドが好んだマスクの利点の裏返しである。イシグロの登場人物たちは、しばしば大して意味のない動作をしている際に大事なことを話すが、エツコの義理の父もその例である。靴紐を結んでいる時や将棋をしている時でなければ本当に言いたいことを言わないのは、彼が日常的にマスクを使う人間であることを示す。そして、このような場面によって、マスクを使うことは実は一般的なのだということが示唆される。ただしイシグロは、ワイルドのように嘘をつくというフィクション性を楽しんでいるとは言えない。イシグロの嘘は、普通の人間の語りのありようが、もともと屈折していることを示し、その点をあえてクローズアップして見せていると捉えることができる。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

ブライアン・シャファーは、スティーヴンズは他人の話をする時にしか自分のことを語れないと指摘しているが (Schaffer 80)、他人のことを自分の分身であると暗示するかのように巧妙に語りながら自分を表現するエツコは、その変形パターンを使っていると言える。自分の話をする際になぜ代理を使わなくてはいけないのかは、この作品でも重要な意味を持つ。作品では戦後の混乱期に無理にアメリカ人について行こうとする子連れのサチコは、のちに娘を連れて外国人と再婚するエツコのイメージに重なっていく。誤解や屈折は当然起こるものだという前提がある世界では、エツコが日本の友人サチコについて語る場合には、サチコの非常識さをほのめかしているだけでなく、実は自分の本当の気持ちを彼女に語らせているようにも見える。例えば、近所の主婦達への不満が示される以下の場面では、サチコの言葉はエツコの心内語であるようにも取れる。

> "I'm sure that made their day," she said to me. "Now they'll have something to talk about."
> "I'm sure they had no malicious thoughts whatsoever. They both seemed genuinely concerned."
> "You are so kind, Etsuko, but there's really no need to convince me of such things. You see it's never been any concern to me what people like that thought, and care even less now." (38)

このような代理の利用は、エツコの場合以外にも見当たる。マリコは、イギリスで自殺するエツコの娘ケイコに重ねて語られている可能性がある。ケイコは渡英してから不幸になるが、母親に無理やりアメリカに連れて行かれるマリコの未来を描いているようにも見える。マリコの前でなぜか縄を手にしているエツコの様子から、後に首をつる娘ケイコを追い詰めた母親を想像するのも無理はないだろう。この作品にある不気味さは、本当は誰について語っているのか釈然としないことにも大いに原因がある。ゴースト・ストーリーには、ドッペルゲンガーという定番があるが、『遠い山なみの光』の場合、そもそもドッペルゲンガーがいるのかいないのかさえ定かでない不透明感が、恐ろしさを増している。イシグロは時折、冷静な表現がヘンリー・ジェイムズを思わせると指摘されるが、ゴシック風の物語では、曖昧さから来る恐怖を描くのを得意としているという点で近い。しかし、イシグロは曖昧さ

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

が生み出す様々な可能性を並べて見せるというより、このような方法でこそ感情表現ができる作家だと考えるべきであろう。イシグロは、登場人物たちの婉曲的な語り方は、結局自分自身の語りの方法でもあると認めなくてはならないとインタビューの際にフランシス・ガリに答えていることも (Shaffer and Wong 136)、その裏付けだと言える。遠回しの語り口は、エツコやスティーヴンズのような登場人物の個人的な性格から来ると同時に、イシグロ本人が物語を通して語る際に繰り返している表現方法でもある。

『遠い山なみの光』は、物語から抜け落ちている部分が非常に多いことにも目を向ける必要がある。イシグロは、グレゴリー・メイソンの質問に答えて、文学の形式に執着するのは退屈であると答えているように（Shaffer and Wong 13)、物語を組み立てることには重きを置いていない。それでも、欺瞞の語りをすると評価されるスティーヴンズの経験に関しては、彼が直接語ろうとしない事実も読者は状況から判断して推測することができる。あるいは時間も空間も歪んだ作品『充たされざる者』(*The Unconsoled*) では、ライダーの演奏旅行中の時間は一応隙間なく連続して流れている。この「狂ってはいるが辻褄は合っている」ドン・キホーテ的世界は多かれ少なかれイシグロの作品に共通するものである。しかし、エツコに関しては、日本からイギリスへ渡る経緯や娘が自殺した理由の説明が省略されているため、物語には大きな断絶が生じている。この作品中の空白は、語りの不確かさと結びつくと、作者が本来意図していなかったとしても、ある種の恐怖に繋がっていく。はじめ血だと思ったものが実は泥だと判明したとエツコが修正しているように、この作品では、思い違いは頻繁に起こる。間違いはいつでも起こりえるものだという前提が用意されているこの作品では、あらゆることが思い違いであった可能性を生む。そのため、ここでは、娘にひどいことをしているのは実はサチコではなくエツコである可能性もあり、語られない空白の時間に恐ろしい犯罪が起きている可能性も否定できない。

この不自然な空白は語られないものの存在を示唆する。これは、良識的でかなり冷静なエツコが感情表現をする不気味な空白であるとも言える。語られる部分が語られない部分も間接的に表すのは、意識が無意識も含む意識全体の氷山の一角であるのに似るが、偽名や代理を使って語る人の語りにも近い。その意味でも、エツコの語りは、自分の経験を人に伝えることを目的としているのではなく、代理のシステムこそ人をよく表現する可能性があること自体を示す。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

3．風景としての古典

これまで指摘されてきたように、イシグロの作品には、しばしば他の作家の作品の雰囲気が紛れ込んでいる。例えば、セバスチャン・グロースが指摘するように、『わたしを離さないで』にはエリオットの『荒地』のイメージが織り込まれているが (Groes 222)、そっくり同じものが移植されているのではなく、時間がないと繰り返す『荒地』とは対照的に、この作品では差し迫った状況下でも「時間はある」とクローンは口にする。この場面でクローンのキャシーが "but we knew we still had time and didn't hurry" (Ishiguro 175) と言うのは、駐車場へ行くのは急がなくてもよいという意味だが、臓器提供を延期してもらう手続きは急がなくてもよいという状況を示しもする。そして、『荒地』とは反対のコメントがさしはさまれることで、核心やオリジナルからの逸脱が浮かび上がる。この好例が示すのは、イシグロの作品中に見当たる他の作家の作品の影は、ちょっとした違和感を持ちこむために効果的に使われていることである。他の作家の作品を思わせる設定は、その影響を示すというより、イシグロの作品がそれとは少しずれていることを印象づける。その意味で、古典は影響ではなく、いわば風景として作品中に置かれ、対比が引き出されている。よく知られる作品とどこか似ているのに異なるというずれは、作品に描かれる時間が既に確定した古典の時間とは別の時間であることを意識させる。

ブライアン・ウィレムズは、『わたしを離さないで』を読む助けとしてド・マンが注目したシンボルとアレゴリーの違いを適切に持ち出し、小説は類似の中に差異が見える場所を生み出すと指摘しているが (Willems 22)、これは『遠い山なみの光』にも当てはまる。ド・マンの議論では何かを象徴するだけのシンボルとは違い、アレゴリーにはオリジナルにはない新たな要素が加わるが、場合によっては、アレゴリーに含まれているものは豊かな嘘であるだろう。そして、この嘘はイシグロの作品では想像力とうまく区別できない。『遠い山なみの光』では、一つにはマリコの一連の奇妙な言動は子供の勝手な想像と記憶が混ざったものだと彼女の母親によって説明されている。さらに、エツコの語り自体に期待や思い違いが混入されることで物語に膨らみが与えられると同時に不気味さを生み出してもいる。このようなレトリックによる正確さからの逸脱は、古典からの逸脱と似ている。ド・マンは作品を批評する洞察 (insight) は、直接的には得られるものではなく、回り道する中で

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

得られると指摘するが (de Man 103)、イシグロの描く嘘や思い込みによって膨らんだ世界はまさにアレゴリー的世界であり、このような場でこそ、語り手が本当に伝えたいことへの洞察が得られる可能性がある。

イシグロは、古典や定型を踏まえながらも、そこから少しずれるという動きの中で、登場人物の感情表現を巧妙に行っている。さらには、このような逸脱は、インターナショナルでありながら独創的でもあろうとする試みに重ねて考えることもできる。わずかなずれによって表現するということは、そこから逸脱すべき本体を前提としている。そして、派生、逸脱するものには、ド・マンが指摘するアレゴリーに含まれる新たな要素と同様、これまでになかった要素が加わっているはずである。エツコが思い切って日本を飛び出した行動力を娘のニキは評価するが、エツコの自分の過去についてのどこかおかしな語りには、不気味さだけでなく様々な可能性の豊かさが含まれている。この不自然な語りの意味を考えるなら、逸脱する力が登場人物の価値の一つであると評価することができるだろう。スティーヴンズの欺瞞の語りが架空の理想的イギリスを浮かび上がらせ、ライダーが多忙で不安定な現代人を代表するように、エツコも普通の人間の生活の不確かさの中で個性を見せている。イシグロの作品は、基本的に固定概念とフィクションと事実の間をさまよっているが、過去をたどる語りの不安定さと豊かさはそれに対応している。

4. 一般的なハイアート

『遠い山なみの光』に続いて書かれた二つの作品は、それぞれ一つの国を舞台としているが、エツコの物語では、きわめて日本的な物語をイギリスで回想するという形が取られている。この作品では、作品の性質を暗示するかのように、冒頭の場面でエツコの娘につけられた和洋折衷の名前の由来が次のように紹介される。

> Niki, the name we finally gave my younger daughter, is not an abbreviation; it was a compromise I reached with her father. For paradoxically it was he who wanted to give her a Japanese name, and I — perhaps out of selfish desire not to be reminded of the past —insisted on an English one. (9)

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

ニキという名前は、どこの国の読者にも比較的受け入れやすい半面、行き場を失っている印象も与える。このインターナショナリズムは、単純に幅広い読者を獲得するのではなく、ここに含まれる問題が作品を複雑にし、ハイアートの方向へ引き上げているとも言える。

グロースが行ったインタビューでは、イシグロは、かつては一流であるためには通俗性を脱して特殊でなくてはならなかった小説が、現代では多くの人に受け入れられる優れた作品が存在し得るようになったと語り、小説の変化に触れている[2]。そこに結び付けて考えると、イシグロの作品としては実験的な『充たされざる者』は、メインストリームの中にいる作家だからこそできた冒険であるように、エツコの奇妙な語りも彼女が優等生的人物であるからこそありえた逸脱だと捉えることができる。そのため、彼女の語りの非常識さは、人気作家が書いた作品であるという安定感とは対立しない。

イシグロは、どこの国の読者でも理解できるインターナショナルな作品を書こうと試みていると本人もしばしば認めているが、典型からの巧妙な逸脱は、イシグロの作品がよく売れるにもかかわらず、なぜハイアートでありえるのかを考える際には意味がある。イシグロの作品が通俗性に飲み込まれるのを止める要素としては、作品中に静かに流れる不協和音のようなものの存在を避けて通ることはできない。読者の国籍を問わない作品には、古典的作品や一般性に飲み込まれない静かな抵抗がイシグロの個性として忍び込んでいる。これは一見、一般的なものの中に混入する特殊なもののようだが、イシグロが描くどこかおかしな人々や秘かな感情は、実は誰でも馴染みがあるものであり、それ自体一般性を持っている。

イシグロは、ある意味で危険物を安全に扱う作家だと言える。登場人物が犯したかもしれない犯罪は穏やかな語りの中に沈められて、表面に毒気が表れることは少ない。あるいは、きわめて個人的な問題であるため、社会的には価値がないと思われる危険のあることを追求し、その中で浮かび上がる一般性の価値に焦点を当てている。イシグロの作品の特徴は、このように誤解を招く可能性があったり、一見価値のないものに焦点を合わせ、ドラマ化している点である。この作風を追跡するなら、イシグロが目指すインターナショナルな小説がどのようなものであるのか探ることにもなるだろう。イシグロの作品は、現代作家としては珍しく共感 (empathy) を求めるのが特徴だと評されることが多いが、この共感とイシグロ流のインターナショナルな小説の特性が繋がっていると考えられる。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

エツコがサチコとなり、さらには一般的な誰かになりえるような『遠い山なみの光』の不確かな世界には、読み方によっては支配的な作者はいない。しかし作者は消えたわけではなく、読者に共感を求める作者の影が見える。この特権をなくした作者は、ネット上で書き込みをする一人の投稿者であるかのようだが、格下げされて古典的作者が持っていた支配力を手放すのと引き換えに、読者の共感に支えられて力を得る作者に形を変えているように見える。

確実に異質であるものを求めるのではなく、身近でわずかに異質なものと関わることは、結局自分の輪郭線をなぞり直すことである。イシグロの作品において冷静であったり嘘をついたりする登場人物達が、それでも読者を遠ざけないのは、身近なものを再点検するようになぞり直すという作業により共通感覚を探っているように見えるためであるだろう。ゴシックはそもそも日常や型から逸脱する一つの形であると捉えることができるが、ゴシック的空間は直接的な感情を不可解さの中に隠すと同時に、実は違和感を使って感情表現を行いやすい場でもある。エツコの語りがゴシック・モードを帯びるのは、逸脱によって注意を喚起しようとする努力の表れでもあり、ここには普通の人間が巧妙に行う自己表現を読み取ることができる。

註

[1] このイシグロのコメントは、次のグロースによるインタビューの際のものである。"The New Seriousness: Kazuo Ishiguro in Conversation with Sebastian Groes" in Sebastian Groes and Barry Lewis ed. Kazuo Ishiguro: New Critical Visions of the Novels. Palgrave MacMillan, 2011, 246-249.

[2] ibid. 262-263.

[3] 『遠い山なみの光』からの引用はすべて以下の版による。ページ数は本文中に示した。Ishiguro, Kazuo. *A Pale view of Hills*. London: Faber and Faber, 1982. rpt. 2005.

Works Cited

De Man, Paul. *Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism*. Minneapolis: The U of Minnesota, 1983.

Groes, Sebastian, "Something of a Lost Corner: Kazuo Ishiguro's Landscapes of Memory

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for Culture in English

and East Anglia in Never Let Me Go" in Sebastian Groes and Barry Lewis ed. *Kazuo Ishiguro: New Critical Visions of the Novels*. Palgrave MacMillan, 2011.

Ishiguro, Kazuo. *Never Let Me Go*. London: Faber and Faber, 2005.

Lydia R. Cooper."Novelistic Practice and Ethical Philosophy in Kazuo Ishiguro's *the Remains of the Day* and *Never Let Me Go*" in Sebastian Groes and Barry Lewis ed. *Kazuo Ishiguro*: New Critical Visions of the Novels. Palgrave MacMillan, 2011.

Humphrey, Robert. *Stream of Consciousness in Modern Novels*. Berkley, Los Angels and London: University of California Press, 1954.

Shaffer, Brian W. *Understanding Kazuo Ishiguro*. South California: The U of South California P, 1998.

Willems, Brian. *Facticity, Poverty and Clones: On Kazuo Ishiguro's* Never Let Me Go. New York and Dresden: Atropos Press, 2010.

Shaffer W. Brian and Wong F. Cynthia ed. *Conversation With Kazuo Ishiguro* . Jackson: UP of Mississippi, 2008.

Synopsis

KAWAGUCHI Toshiko

In Kazuo Ishiguro's "A Pale View of Hills", recollections of post-war world in Nagasaki are revealed by a decent Japanese woman Etsuko. She speaks as if communicating simple facts, but the mysterious situations or the Gothic mode unfittingly used in this story insinuates concealed tragedy or repressed feelings. Her commonplace post-war hardship and the unusual atmosphere that surrounds her successfully cover up what lies behind. But when a slight incongruity is found in Etsuko's narrative, repressed memories are given expression.

In this story, the focus is placed on something that is slightly different from familiar facts. The Gothic mode employed in this story is of use to construct the international novel that Ishiguro wishes to develop. Faint unusualness that is distinct from dramatic unfamiliarity is important for this achievement. By tactfully betraying unusual parts of a plain woman little by little, Ishiguro creates a story that can be accepted by many readers, and also maintains the originality that gives the story a trait of high art.

NII-Electronic Library Service